

# 「チ。」

— 天動説から地動説への転回 —

日時：2026年 7月17日（金）

講演会：（受付開始：18：30～）19：00～20：00

観望会：20：00～20：45

会場：長野工業高等専門学校 B棟 501番大講義室（B棟5F）

デジタルプラネタリウム上映予定

【お問い合わせ】

長野工業高等専門学校 図書館

電話：026-295-7005

科学の本質は、「ただ信じること」ではなく、「問い、疑い、考えること」にあります。そして、その問いの先に広がる世界を探究していく営みこそが科学です。

魚豊による漫画『チ。—地球の運動について—』は、「なぜ人は真理を求めるのか」という根源的な問いを、「天動説から地動説への転換」という歴史的テーマを通して描いた作品です。作品は史実をそのまま再現したものではなく、フィクションとして構成された“哲学的歴史劇”ともいえるでしょう。

古代ギリシア以来、人々は惑星や星空の動きを説明するために、天動説や地動説といった宇宙観を築いてきました。やがて中世ヨーロッパでは、プトレマイオスの宇宙観が広く受け入れられ、「地球は宇宙の中心にあり、天は完全な円運動をしている」という天動説が、宗教的世界観とも深く結びついてゆきます。しかし、15～16世紀のルネサンス期になると、古代ギリシアの思想が再評価され、ニコラウス・コペルニクスの『天球の回転について』によって、地動説は再び大きな注目を集めることになります。

『チ。』では、この「地球が動く」という発想の登場が大きなテーマとなっています。しかし実際には、地動説が社会や学問の中で受け入れられ、「新しい宇宙観」として定着するまでには、さらに約200年もの時間が必要でした。本講演では、『チ。—地球の運動について—』を手がかりに、フィクションと史実の違い、天動説と地動説の本当の姿、コペルニクス、ケプラー、ガリレオらの挑戦、トーマス・クーンの「パラダイム転換」という考え方などをわかりやすく紹介しながら、「世界の見え方が変わる」とはどういうことなのかを、星空と科学の歴史を通して考えます。

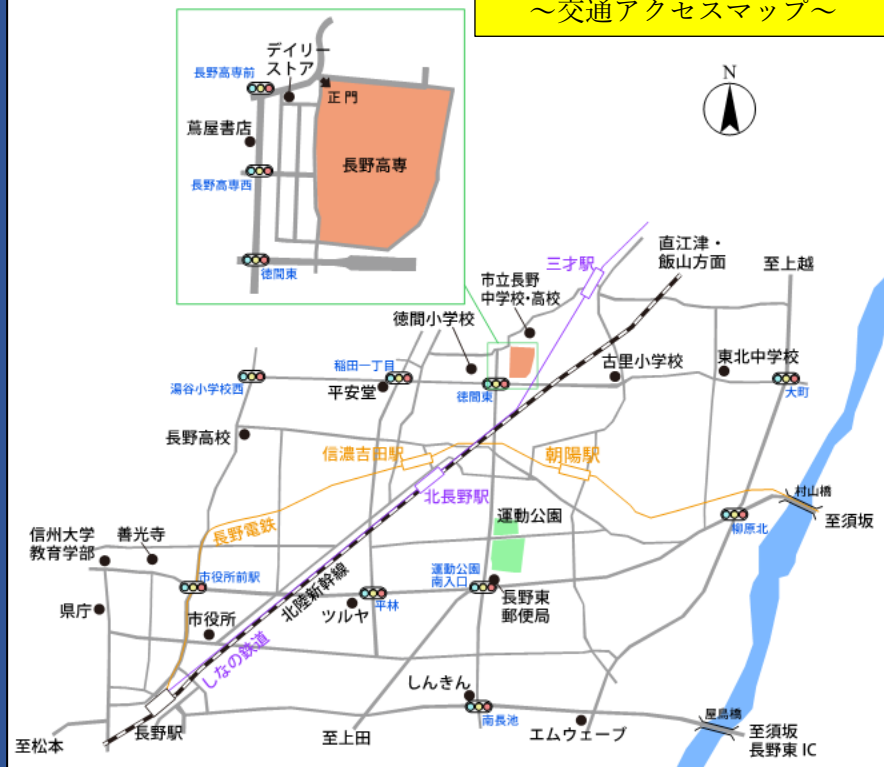


講師

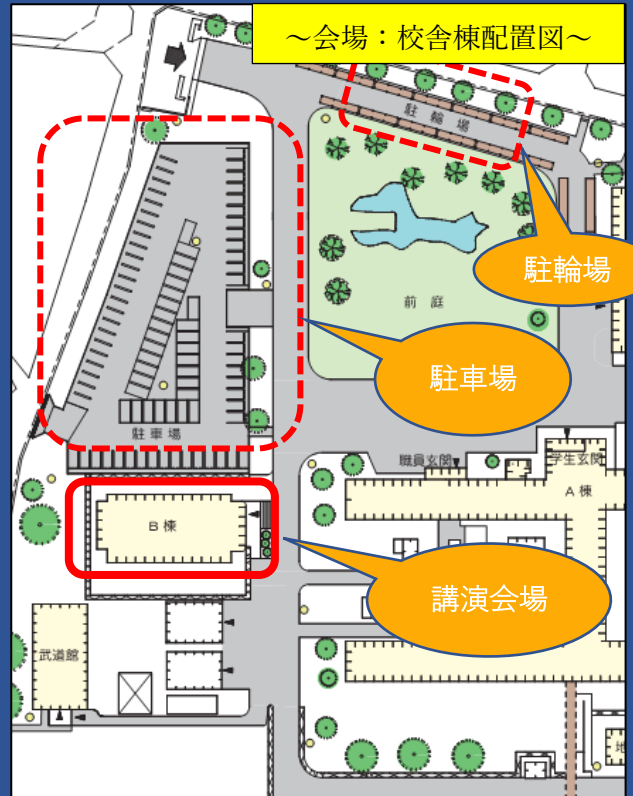
大西浩次先生

(長野工業高等専門学校嘱託教授)

～交通アクセスマップ～



～会場：校舎棟配置図～



長野高専の図書館は、地域のみならずにも開かれています。ぜひ身近な学びの場としてご利用ください。

【長野高専公式Instagram】  
今年度、開設されました！

